

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 26 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内

TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp



「信じる」ということに向き合う

北海道教区主教 ナタナエル 植松 誠

新しい年を迎えました。例年、クリスマスを迎える直前の12月21日に使徒聖トマスの日を祝います。一年の終わり近いその日は、私たちを改めて「信じる」ということに向き合わせてくれます。他の弟子たちが復活のキリストに出会ったとき、その場にいなかったトマス。イエスを慕う心が強ければ強いほど、頑なになってしまった彼は、その思いとは裏腹にイエスを拒絶します。そのトマスにもイエスは現れ、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言われます。クリスマス物語では、キリストの誕生を告げられたマリヤとヨセフが、恐れおののきながらもその驚くべきお告げを「信じる」ことから先の見えない生活を始めます。

今現在、「信じる」という選択は、私たちの信仰生活において最も大切なことと承知しながらも、ともすれば蔑ろにしている現実気づくことがよくあります。こんなことをしていて何になるのだろう、こんな非能率的なことがどのような結果を生むのだろう・・・と、人間的な計算だけで結果の見えないことにあせりを感じることもしばしばです。

私が米国で神学生だった頃、出身教区であったオクラホマ教区の、田舎の小さな教会の婦人会から奨学金をいただきました。私が行ったこともない教会でした。その婦人会にとっては何の縁もない日本からの留学生に、大切な献金、それも私にとってはかなりの大金を送るということがどれほど無謀なことか、私自身も半信半疑でそれを受けたのでした。どのような話し合いのもとにそれが決められたのかは未だにわかりません。ただ、一つ言えることは、祈りをもって信じて送ってくださったのだろうということでした。私にとって、それは神学生としての生活の助けになっただけでなく、何か目には見えないけれども大きな励ましとしての力をいただいたのでした。

日聖婦のお働きは多くの困難の中でも、祈り信じることの上に成り立っているはずです。献げものも、人間的にすべてが見える結果として出てこなくても、必ず、いつか祝福の内に奇跡が起こるのだと信じます。

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり

私の道はあなたたちの道と異なると主は言われる。

天が地を高く超えているように

わたしの道は、あなたたちの道を

わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。」イザヤ書55：8～9

私自身、生まれた時から、青年になって教会に背を向けた時代も、そして聖職になってからも婦人会の方たちに大切にされ、今に至ります。お一人おひとりの祈りと信仰に、今も日々励まされる者の一人なのです。

（2017 年 1 月 13 日 寄稿）



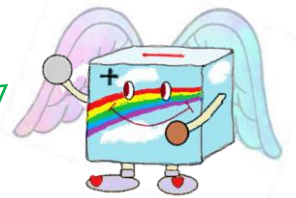
第一回運営委員会 大宮聖愛教会にて

「日聖婦コア担当役員として」

テレジア 木村静代
(北関東教区 大宮聖愛教会信徒)

このたび日聖婦役員として 私達の北関東教区婦人会がさまざまな全国的な活動に組み込まれることになり、私自身もコア担当として何もわからぬままに歩みはじめさせていただいているところです。

当教区では昨年10月に宣教120周年記念の行事が行われました。このため、広田主教様が折々に、北東京地方部と呼ばれていた当教区の歴史や、



昨年6月の総会にて、北関東教区が今期の役員会をお引き受けくださることとなりました。コア担当役員の木村静代さんからのご挨拶を頂きました。

1897年1月の大会で「北東京地方部婦人伝道補助会」が組織された経緯などをお話し下さり、マキム主教夫人が1915年に急逝されるまでその会長として尽力されたこと、また「米国の婦人伝道補助会」を日本に紹介したのもマキム夫人であったことや「一致献金」のことなどもお話しくださってありがとうございました。日聖婦の125年の歴史や伝統にも旧知の親しみを感じつつ受け止めることはできているように思います。

また広田主教様は20数年前に当教区が日聖婦の役員を担ったときにもチャプレンとして参加された経緯がありましたので、私達に日本聖公会婦人会のことを、数年前から少しずつお話しして下さっていた事を思い出しますと、当教区婦人会が、このたびの日聖婦の会長区に選出されたことは、あながち偶然ではなく、あらかじめ準備されていたこととして、真摯な気持ちで、お引き受けしてゆくという決心につながっていったことを思い出します。

また、同じ頃、アプタン先生の逝去50周年記念式典も当教区で行われました。女史は28歳で来日し86歳で(戦時中を除き)天に召されるまで、北関東の幼児・女子教育に邁進され、多くの幼稚園・教会を建て、教員の養成をしましたが、晩年はすべての栄達から退かれて一人の病者とともにある道を選び、日本を終焉の地とされた婦人宣教師です。

昨年、こうした偉大な先達たちを思い出こしな

がら私は、毎日のように、牧師が大宮愛仕幼稚園から拝借して教会に飾っていたアプタン先生の大きな写真を見続けていましたが、ある日 写真の中の先生の黒衣が軽やかな淡いドレスに変わり、ヘアスタイルも、周りの小さい天使たちと同じふわふわの短い髪形で、20歳くらいに若返った先生が、にこやかに微笑み、逆に私を見つめ返してこられた。：あたかも、こちらから覗こうとしている私をみつけたこどもたちに呼びこまれた先生が、駆け寄って覗きこんだともいう風に・・・

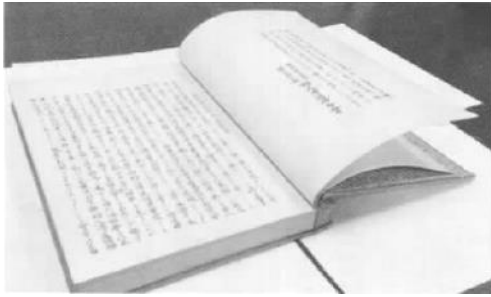
私は思わず、声を上げ目を醒ました。それは写真を凝視し続けていた頃の寢覚めの夢でしたが、以来、心が軽くなり、爽快な気分になりました。：たとえ夢であっても、黒衣の悲しげな老人のアプタン先生ではなく、天国で子どもたちと楽しむ若々しい先生をみることで、また私達を喜び迎えてくださっていることもわかりましたから・・・

「外なる人は滅ぶれど、内なる人は日々新たに・・・」このアプタン先生の大叔父に当たる人が、あの黒船で浦賀に来航したペリー提督です。開港以来婦人宣教師たちや献金によって、日本の女子教育は飛躍的な進歩をとげました。

いまの時代に、アジア・アフリカの婦人達、こどもたちに日聖婦・コアができること・・・また個人ができることはたくさんあるように思います。

出会いを喜び、たのしみつつ：導かれてゆきたいと願っております。

どうぞ、これからよろしくお願いいたします。



「記念の書」(おぼえのふみ)紹介

北関東教区主教 ゼルバベル 広田勝一

婦人会員のつとめの原点を顧みますと、そこにはまず「祈り」が核となっています。祈りは身近なところから世界へと広がります。もう一つの焦点は「感謝」であります。喜びの人生ばかりではありません。しかし困難な中にも神は共におられます。日常生活での感謝もあります。こうした神の恵みへの具体的な応答として献金を捧げる日ごとの営みが、長年「感謝箱献金」として展開されてきました。祈りと感謝、これは婦人会の根幹のみならず、私たちの信仰の原点でもあります。(北関東教区時報 第305号 広田主教執筆文より一部転載)

今回は、北関東教区における初期の婦人会の歴史を語る貴重な資料を紹介します。

『日本聖公会北東京地方部婦人伝道補助会沿革誌』という立派な装丁の本です。これを記したのがランソン女執事です。ランソンさんはヘーウッド宣教師と共にまず川越に定住します。そのランソンさんが教区婦人会の草創期の書記として、この毛筆の記録を「記念の書(おぼえのふみ)」として残しました。ランソンさんは川越から仙台の青葉女学院で活躍し、また磯山聖ヨハネ教会を設立した宣教師です。以下、序文のみ紹介します(旧字体を新字体に改めた以外は、ほぼ原文のままです)。婦人会の歩みの一助になれば幸いです。

「北東京地方部婦人伝道補助会沿革史」

女執事 アンナ・エル・ランソン姉

本沿革史は昭和三年五月十日日光に於ける北東京地方部婦人伝道補助会第三十八回大会の決議に基き北東京地方部婦人伝道補助会創立以来の沿革を誌するものにして本簿は当時の会長女執事アンナ・エル・ランソン姉の寄贈せられたるものなり

日本聖公会北東京地方部婦人伝道補助会

明治二十五年十一月故小宮珠子女史の發起にてメリーの友という婦人会が組織され 東京市内における婦人会の連絡を計りかつ会員一致協力していささかなりとも伝道事業の一補助となることを期し毎月二錢ずつの伝道費を集めておりました ちようど翌二十六年米國聖公会婦人伝道補助会名誉書記ツィム夫人が来朝され市内の連合婦人会の席上にて米國の婦人補助会に就いて熱心に説かれ我國においても婦人補助会の支部を作る事を勧められました結果 明治二十八年四月北東京地方部婦人会大会を開き三年毎に米國の補助会に献金の十分の一をささげる事を決議いたしました 後にいたりて日本聖公会伝道局が台湾に伝道を開始するにあたり本会は米國伝道局へ献金するほかに伝道局へも更に献金してこれを助ける事として明治三十年一月監督マキム夫人を会長に仰いで北東京地方部婦人伝道補助会と称することになりました 以来益々發展すると共にその献金の率も増加して来ましたが大正十二年東京教区が設置されると教区内に属する各婦人補助会とは自然に分離するに至り、大正十三年十一月二十九日監督マキム師は地方部内に属する婦人補助会の代表者と内外の婦人教役者とを浦和に召集し新たに北東京地方部婦人伝道補助会を組織されるに至りました 現在の支部は二十二であります 会員は三百八名であります

(昭和四年二月)



訪問先で歌う、タクトFの皆さん

南相馬「支援センターしんち・がん小屋」

水曜喫茶コンサート

グループ“タクトF” 代表 山本 洋子
(横浜聖アンデレ教会信徒)

10月10日～12日に南相馬・新地町をタクトFメンバー10名で巡ってきた。今回で4度目の訪問。昨年まではコンサートと仮設住宅の方々との懇談を中心に行ってきたので、地域の状況を見る間もなかったが、今回はゆっくりと被災者の方との交流と周りを見ることが出来た。関連の教会からの献金に加え感謝箱献金の「東日本震災被災者支援積立金」からも費用の一部を支援いただきありがとうございました。

訪問地は、まず浪江町の「希望の牧場」へ。被爆牛と共に運命を共にして行く決意の代表の吉沢正巳さんは、「経済ではなく命をどう扱うかを考えた5年」と。この教訓から自然エネルギーづくりを深く考えながら、人生テーマとしてこの事故の語り部として活動し続けたいと言われた。

その後、南相馬市の小高地区へ。町は整備されたが、今年の7月に帰宅困難地域の解除に伴い、帰還指示がなされるも線量の高い地区に戻ろうと決めたのは高齢者ばかり。次の日は整備されつつある海岸を経て手づくりふくろうでおなじみの塚合仮設住宅集会所へ。顔なじみの方々との再会。皆さんとお茶をしながら、健康の様子やご自宅の様子などを個々に伺う。その後、私たちの歌を聞いていただいたり、一緒に歌ったり。「久しぶりに声を出して歌ったよ～」と笑顔。この言葉で私たちは救われる。

その後、「支援センターしんちがん小屋」へ。この仮設も2017年3月には閉鎖される。浪江町など線量の高い地区から避難された方々のために1年間、延長されたが、先の見えない生活を強いられ、目途はまったく立たない。コーディネーター高木栄子さんと共に加藤和子さん、三宅友子さんの案内で巡礼へ。ふじ幼稚園は磯山聖ヨハネ教会の信徒中曽順子さんが園児と共に津波被害で亡くなられた場所。友子さんは順子さんと幼友達で思い出を話され、今でもいなくなったことが信じられなく、帰ってくるような気がする。母の死の知らせを受け、横浜聖アンデレ教会で三原司祭と共に祈った息子さんは今、新地町で保育士として活躍され、近所の子どもたちからも慕われている。

その後、慰霊碑を訪問。新地町は整備がかなり進み、仮設住宅を出て、安定した生活を始められた方が多い。町に動きが感じられる。

最終日は勤労青少年ホームで毎週水曜日に開かれている、支援センターしんち・がん小屋水曜喫茶でのコンサート。聖公会の教会や関連大学のボランティアの手作りケーキとコーヒーで、加藤和子さん、三宅友子さんが中心になって続けている。ここに集う人たちは仮設住宅で仲良くなった方々。共にちょっと固めのクッキーとコーヒーで懇談。のど自慢の方々の歌を皆で楽しみ、その後、私たちのコンサートを聴いていただいた。今後は忘れてはならないが、どのような関わりが出来るのかを考えて行きたい。まだ、戸惑いの中にいる。



小名浜聖テモテ幼稚園遠足(国立ひたち海滨公園 2016 年 5 月)

原発問題プロジェクト

リフレッシュ・プログラム

日本聖公会・正義と平和委員会

原発問題プロジェクト 事務局長 池住 圭

新たな枠組みの中で

震災から 2016 年 5 月まで、日本聖公会は「東日本大震災被災者支援 いっしょに歩こう！プロジェクト」として、さまざまな支援活動を行って来ましたが、2016 年 6 月の「日本聖公会第 62（定期）総会」において、いっしょに歩こう！プロジェクトは正義と平和委員会の中の一つのプロジェクトとして位置づけられました。名称も「日本聖公会正義と平和委員会・原発問題プロジェクト」と改められ、新たに構成されたプロジェクト委員会のもとで、長期的にこれまでの歩みを継続、かつ発展させることになりました。これは、原発問題が正義と平和の問題、いのちの問題であるとの強い認識からです。

今総会后開催されたプロジェクト委員会でも、放射能汚染のために十分に外遊びができない子ども達への支援、リフレッシュ・プログラムをその活動の中心におくことが決められました。原発事故から 6 年目を迎えようとしている今でも、子ども達に対して未だに安全な環境を提供できずにいるからです。子ども達の多くは、土や草花、木の実、昆虫などに直接触れることができないなど、相変わらず外遊びにたくさんの制限を強いられています。

また、原発事故に関する報道がどんどん少なくなるに伴い、急速に風化が進んでいます。復興・復旧の文字を目にする度に、その実感が持てずにいる多くの人々は、日々取り残されていく恐怖の中にいます。プロジェクト事務所のある郡山市内にも、いまだにホット・スポットと呼ばれる放射線量の高い区域が点在し、たくさんの人々が、不安な日常と折り合いをつけながら生活せざるを得ない状況が続いています。



国立磐梯青少年交流の家にて(2016年2月)



郡上八幡にて、川遊び(2016 年 8 月)

感謝箱献金を用いさせて頂いて

このような中、2016 年もたくさん子ども達に、放射能汚染を心配することなく、思い切り外で遊ぶことのできる機会を提供することができました。小名浜聖テモテ幼稚園には 4 回の親子遠足、郡山セントポール幼稚園には、8 回の遠足に加え、5 回の未就園児を対象とした「スマイルひろば」を支援することができました。

また、沖縄教区との協働で「沖縄でホームステイ」、九州教区との協働で「南の島で夏休み」、さらに名古屋キリスト教社会館との協働で「岐阜県郡上八幡子どもキャンプ」に園児や卒園児とその家族を送り出すことができました。

皆さまの変わらぬご支援に心より感謝申し上げますと共に、今後も、お祈りの内にお覚え続けて頂きますよう、お願い申し上げます。



HLID の子どもたちとブラザー・アンドリュー

エルサレム教区

聖地ろうあ子どもの里

HLID の子どもを支える会

吉松英美（東京・聖オルバン教会信徒）

いつも「聖地ろうあ子どもの里」に対し、ご理解とご支援を賜り、ありがとうございます。同施設から年次報告（2014-2016）が届きましたので、その中からいくつかをかいつまんでご紹介いたします。（なお、本通信でこれまでに触れてきたこともいくつかあることをご了承ください）

学校 - 125 人が在籍

現在本校には幼稚園から高校生まで合わせて児童生徒が 125 人、教師が 34 人います。幼稚園および小学校の場合、生徒一人当たりの授業料は年額 JD2,400（1JD=165 円相当）、中学・高校生は年額 JD3,000。（参考：東京都内の私立高校の平均授業料は年額 44 万円）しかし、全額払える保護者はほとんどいないといえます。

大学への進学

ここ数年、卒業生の中から大学へ進学する人が出てきています。これまでに修士号取得者が一人、取得中が二人、学部学生が一人います。いずれも特別支援教育専攻です。

STRIDE - 障害者の訓練と障害者教育人材育成機関

障害者の訓練と障害者教育に当たる人材の育成を担うこの部門は、中東全体をカバーする一大拠点です。“教育は人なり”という方針に基づき、「聖地ろうあ子どもの里」がもっとも力を入れていることの一つです。

職業訓練所 - 日産特約店から求人

卒業後に備えて自動車修理を始め、木工、金工、女子には刺繍、縫製、織物、モザイク制作、陶芸、家事、コンピューター科学、図書館での仕事、子供の世話等、手に職を身につけることを学びます。今年から学習指導要領の改定により、女子にも木工が加わりました。ゲストハウスの螺旋階段、ドア、テーブルなどは皆訓練生の制作になるものです。彼らは在学中に自動車修理士などの資格を取得します。

現在男子が 19 人、女子が 20 人職業訓練生として学んでいます。地域の人たちからの受注により自動車修理、金工、大工等では年間 JD61,000（約 1 千万円）の収入がありました。刺繍や陶芸作品等の売店での売り上げは JD34,000（約 560 万円）でした。

このほど、アンマンにある日産自動車特約店から職業訓練所卒業生に対する求人がありました。訓練所の優秀さが認められた証拠で、特記してもいいでしょう。

重複聴覚障がい（三重苦）部門

ここには現在 13 人の三重苦の子どもがいます。年々少しずつではありますが、増える傾向にあります。教師たちは手話に重点をおいて指導しています。目の見えない人が学ぶ手話とはどんなもののでしょうか。ここではフランス人の盲人教育家 Louis Braille が考案した点字と、掌と掌を重ね

て、あたかも以心伝心を図るようにして意思を伝える触知式手話を使います。1日の授業が終わると、耳の不自由な子どもたちが来て、三重苦の子どもたちが手話をより簡単にそして器用に使うことができるよう手助けをします。ここでのスタッフは総員20人です。24時間いつも誰かがついていなければなりません。もっとも労力と忍耐を要する仕事ですが、その意義を問われて、「三重苦であれ、他の障害者であれ、人はすべてかけがえのない存在であり、世の中に有意義な貢献が期待されている」と答えています。「有意義な貢献」には、彼ら自身が何かをすることだけではなく、彼らとの共生によって、わたしたち自身の無知、無関心、無理解等に対する蒙が拓かれるという教育的な意味もあるでしょう。自分を試されることばです。

手話部門

手話は耳の不自由な子どもたちが最初に習う言葉です。ヨルダン式手話と呼ばれ、アラビア語と英語も手話によって教えています。「手話は英語と同じように数ある言語の一つであり、特別視しないことが大事である」とは、Br. Andrewの言語観です。味わうべきことばではないのでしょうか。彼は障害のある人も“特別視しない”のが基本です。「人はすべて神の似姿に創造され、かけがえのない存在だから」です。

学校に用のある人たち(保護者、医療スタッフ、政府の人たち、警察官、銀行員、旅行ガイドたち)も仕事に役立つ手話コースを受けたいといっています。2015年にはヨルダン式アラビア語手話辞典を完成、手話通訳試験用の受験の手引きも作成しました。手話言語部門のスタッフの活躍が、昨年、アンマンで開かれた手話通訳者会議でヨルダン教育省の担当者に高く評価され、後日、Br. Andrewが呼ばれて助言を求められたことは、HLID通信No.5でお伝えしました。

聴覚研究所

聴覚研究所では、聴能力を検査し、外来の患者だけではなく施設内の子どもたちにも補聴器を供給しています。新しいプロジェクトでは、Jofeh, Kreimeh, Irbid, Salt, East Ammanの5箇所にあるキリスト教慈善団体と協力して仕事をしていますが、仕事の配分はシリア難民対象に60%、ヨルダン国民対象に40%となっています。

この施設の聴力研究所を訪れる患者は年間3,000人。ここだけで数百の補聴器を供給している他、難民キャンプにも数百個の補聴器を納めています。

外部への働き

地域の障害者センターやリハビリプログラムを通じてのアウトリーチ・プログラムは、障害者や耳の不自由な人たち向けのリハビリや治療、教育や職業訓練サービスにおける要石です。プログラムには保護者や難民キャンプの地域メンバー、およびこうしたサービスを受けられない遠隔地にある村々、農村地帯も含まれます。これまでに800人の人たちがこのプログラムの恩恵に浴しました。

シリア難民

2012年にシリアでの戦争が勃発して以来、アウトリーチ・専門家チームは、Za'atari難民キャンプ(朝日新聞2017・1・1参照)や地域障害者センター、キャンプの外にある施設などでリハビリと教育的な面での奉仕活動をしてきました。ヨルダンの障害者支援特別施設、学校、医療機関、地域プログラム、企業、自治体等と協力して様々なサービスを提供しています。2013-2015年に3,000人の子どもたちと大人がリハビリや特別教育、訓練、セラピー他のサービスを受けました。国際的な救援組織が財政支援と機材の提供をしています。

(JofehとKreimehにある地域リハビリセンターについては、紙面の都合で別の機会に譲ります。)



2016年10月25日に横浜山手聖公会で感謝箱献金のお
 献げ先のひとつであり、ケニアで女性と子どもの福祉のた
 めに活動する団体「サイディアフラハ」の報告会がありま
 した。



スライドを用いて現地の様子をご説明頂いた

当日は曇り空の下、約30名の方々にご参加いただき、団体の運営者のひとりである荒川勝巳氏
 にお話しを伺いました。以前から折にふれ、主たる団体の働きである養護施設や他の地域セミナー
 などの社会活動に焦点をあてて、「ガリラヤのほとり」で皆さまにご紹介してきましたが、サイデ
 ィアフラハは養護施設だけでなく、現地ケニアのキテンゲラ市で幼稚園、小学校、裁縫教室や裁縫
 工房も運営し、現在では約140名が学んでいるそうです。男尊女卑が根強く残るケニアで、福祉的
 福祉的ニーズに応え、女子の保護や教育を行なっているサイディアフラハですが、必要に応じて男
 子の受け入れも行なっており、実際に1999年に施設に入所した当時の男児が26歳に成長し、現地
 では就職が難しいとされる警察官になって、また別の元男児は28歳に成長してよき家庭のパパに
 なって、サイディアフラハを再訪問してくれたことを、荒川氏を含め現地スタッフは喜んで迎えた
 とのことでした。

ケニアでは公立の小学校もありながら、1クラスの生徒数が100名もおり、子どもたちが集中し
 て勉強ができる環境ではないそうです。そんな現地のニーズを受け、サイディアフラハでは私立小
 学校を設立。現在は4学年の子どもまでが1クラスを約30名程度という、より集中できる環境下
 で学んでいます。公立の小学校では行っていない本の読み聞かせなどの情操教育も取り入れ、外
 部からの寄付金だけでなく現地での井戸水の販売、日本でのグッズ販売などで運営資金を増やす努
 力をしているそうです。荒川氏は子どもたちがバランスのよい社会人に育つことを願っていると
 お話ししてくださいました。

また現地ケニアでは若い女性の職業の選択肢として幼稚園の先生や看護師があげられるそう
 ですが、他にはあまり無く、団体の運営する裁縫教室や工房は女性の活躍の場を広げる一助になっ
 ているとのこと。荒川氏はケニアではまだまだ沢山の福祉的ニーズがあることに触れ、団体として何
 ができるのかという苦悩とある種の使命感を持っておられるように、今回の報告会に参加して感じ
 ました。今後も神さまのお見守りのもとで、現地のニーズに即した活動が豊かに行えることをお祈
 りします。

(報告者：相宮陽子)



読み聞かせの時間、お話を夢中に聞き入る子どもたち



報告会でのグッズ販売の様子





教区婦人会からの声

今回は、神戸教区婦人会代表の深田さんからご寄稿いただきました。神戸教区も地域が広く、各教会の婦人会の意見をまとめるのも大変とお察しします。その中で、教区での感謝箱献金のお献げ先を考慮して実施されていることをコアとしても嬉しく感じています。人数や献金額が減少していることは、全国的な傾向ですが、これからも献金の額ではなく、お献げ先の方たちの前進を願い、共に祈りつつお献げしていきたいと思います。

神戸教区婦人会の働き

神戸教区婦人会 代表(会長) セシリア 深田久美子
(米子聖ニコラス教会信徒)

神戸教区婦人会では、西は下関から東は神戸、中国・四国地方全域を含む広い範囲で活動しています。当教区には27の教会があり、そのうちの20教会に婦人会があります。

長い間、神戸が中心になって活動をしていましたが、活動の内容を簡素化し、誰にでもどこの地域でも出来るようにし、大会・代表者会も日本聖公会婦人会に合わせて3年に一度としました。現在事務所は米子聖ニコラス教会(山陰伝道区、鳥取・島根6教会)を中心に担当しています。先日の鳥取県中部地震に際しては、各地から、ご心配、お見舞いの便りを頂き有難うございました。御礼申し上げます。

震源地に近い倉吉市には聖公会の教会はなく、県内の各教会でもそれぞれに強い揺れを感じたものの、被害はありませんでした。しかし、所用で倉吉市の近くを通ってみると、ブルーシートの屋根が目立ちます。13000軒余りの全、半壊の家があるそうです。鳥取県中部の皆様が一日も早く元の生活に戻れることをお祈りしています。

感謝箱献金の教区に託された献金の使い道は、各教会婦人会のアンケート結果を参考にして決めています。昨年度は下記に献げました。

- ライフリバー ○ネパールの子ども支援 ○バンサーイターン ○原発プロジェクトのため
- (光朔会) オリンピア ○高松聖ヤコブ教会建築資金

「ネパールの子ども支援」は徳山聖マリア教会信徒の山本アサ子姉が中心となってたびたびネパールを訪問、支援を続けておられます。

「(光朔会) オリンピア」は神戸市内等にある高齢者福祉施設で、信徒の多くの方が入居させて頂いています。当教区でも会員の高齢化は進んでいますが、それとともに、皆が集う教会の建物の老朽化が進み、次々と建築・改築が進んでいますが、資金には困っておられます。婦人会でも、皆様の尊い感謝箱献金より、今年度は「徳山聖マリア教会」「広瀬基督教会」へ一部献げさせて頂きました。

2017年度は3年に一度の「婦人会大会」と「代表者会」が神戸聖ミカエル教会を中心に開かれます。大会では、研修・親睦を中心に久しぶりに会う友との話が弾みます。代表者会では、活動目的達成の為の決算・予算・事務局代表選出・次期大会開催教会の選出等盛りだくさんです。

各伝道区内では、伝道区会等の時に、婦人会の交流もありますが、20教会全部が集まるのは3年に一度ですので、27全教会に呼び掛けて参加を募ります。

「前に婦人会を脱退してしまっていて今になって思えば、婦人会活動は大切ね。」などの声も聞かれますが、再入会はなかなか難しいようです。

神様の見守りの中で、婦人会の活動が御心に叶うものに成りますよう祈りつつ。

感謝箱とわたし



神学生 洗礼者ヨハネ 大和孝明

2016年10月7日、婦人会感謝箱献金事務局（コア）の皆様に聖公会神学院までおいでいただき、感謝箱献金について様々な説明を受けたことが、私の献金を見る幅を広げてくれました。様々な活動の展開を知り、それに協力したいと思えること、祈りの課題としたいと思えること、それは献金にあたってとても大切なことです。今回の説明を通じて、世界の様々な場所で、地の塩、世の光として活動しておられる方々について知ることができました。特に子供や女性の権利向上と経済的自立に関する事業が、献金先として多く選ばれていることにも、共感をおぼえました。また、感謝箱のお働きが、長い歴史を持つことも、初めて知りました。

私達はお金を、ただ出入りするもの、貯めたり使ったりするものとして、日々眺めています。ですが、それが長い旅を経て、誰かの支えとなることを、想像したことがあるでしょうか。私の出身教会である東京教区清瀬聖母教会も、創立時に婦人会の大きなサポートがあったと伺っています。そこで信徒として育てられ、奉仕者としての道を歩いている私が、今感謝箱のことを聴き、それが新たな支援につながっていく。小さくはあっても、このような祈りと、思いのこもったお金と、奉仕の循環が続いているからこそ、（大げさな話ですが）どんなに貪欲と、悪いお金と、支配の循環が、人々を抑圧する世界にあっても、人間は尊厳を失わず、神様に導かれて生きていけるのではないのでしょうか。

これから先、どのような場所で働くとしても、婦人会の皆様の暖かな見守りのもとに、活動していくことができるのだと感じさせてくれる、とても良い報告会でした。感謝申し上げます。



プロフィール

出身地:大阪生まれ、埼玉・東京育ち
特技:古文書(くずし字)が少し読める
趣味:最近は陶磁器に興味がある
社会福祉法人滝乃川学園にてヘルパーの経験を経て、2014年に聖公会神学院へ入学。



絵：三原晶子

「わたしの目に、あなたは価高く、貴く」

銅より銀、銀より金と、オリンピック選手は、最高の価値、金を目指します。サファイアより真珠、真珠よりダイヤモンド、という価値は、非常にわかりやすいのですが、人生における、最大の価値とは何でしょうか。人はそれを得ることが幸せだと考えるのです。

貧しい木こりの子ども、チルチルとミチルは幸せの青い鳥を求めて、旅に出かけますが、ついに見つからず、落胆して家に帰りますと、自分たちが飼っていた鳥が青いことに気づきます。幸せは身近なところにあったというお話です。

人間の営みは、実にその最高の価値、幸せを求めることに目的があり、教養や知識、技能を磨くことと同意に、宗教もまた、そのために必要とされるのかもしれませんが。この価値について、「べっぴん」が美しい女性のことだと思っていたのですが、ああそれは「別品」なのかと、朝ドラで知らされました。特別な一つしかない、心を込めた手造りの別品には、まさに価値があるのです。数ある中で、この手造りのこぎん刺しは、他にはないものとか、あなたの「パウンドケーキ」は最高とかと言って、その価値を認めるのです。そう言えば、今年になって1月2日のお正月に、98歳の生涯を全うした男性が教会のバザーなどに、手造りのパウンドケーキを50本とか作ってくださったということです。時々そういう男の人がいますね。仕事を終えて、そこに生きがいを求めておられたのでしょうか。

「もし愛がなければ、すべては無に等しい」という価値観がキリスト教の神髄です。冒頭のみ言葉は、イザヤ書43章の言葉ですが、それに続く言葉が、「わたしはあなたを愛し」です。わたしはもちろん神様、あなたは、私たち一人一人なのです。

チャプレン 司祭 ヤコブ 三原一男